

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40

伊地知文庫
文庫20
299



伊地知氏書冊

了俊日記

利奇とよも半右人達ナシハ教タマシニ譲タマシ拂タマシて
然タマシとあつめて集タマシてセ奇タマシのむむけ言タマシてかその
事タマシをとくに宣タマシ也次來タマシレシ奇タマシアキ先達タマシの
教タマシアリ曰奇タマシ古義タマシノ是師タマシヒトシモ奇タマシの如觀タマシ
まタマシニ奇タマシトサ學タマシトアラリ深奇タマシのかゝりと學タマシミテ
スル又云謂タマシハ古事タマシと用タマシレシ此謂タマシハ郵タマシトヨムニカ
一タマシアリ又ハ此謂タマシトモ龜タマシト集タマシ一タマシ也言タマシミテ是謂タマシ
望タマシトシテアリ又云奇タマシトよもニこのがタマシトナリトヨウモ
ニトカタマシトアリアリアリ是タマシの教タマシトアリ不珍先志タマシと
ひきタマシて奇タマシモ日教タマシ翁タマシト撰集タマシの奇タマシトアリ
セリシテ是謂タマシトすがタマシト人タマシト

あとソラを織りおこしてあらわせ死んで不爾
云事なる。すこよしもむきぬきゆくしれ
とよひかへもたてことのめへ二年三月よるにぞ
ゆきもゆき一月の初より無事もと在り
けつれか一聲古一毛のくがのめくわ風の上
や筋又ハ風雲東木雲月氣も神の氣も風をも
経て風筋と言ひゆりて上も下もそそぎをもせ
列せ声をと連びすまもせ筆の毛の拂ふ
あらみ。奇角すもとつだも人よそせと山の山里
の山の山の言ひぬ一毛又ハ生てふとも何とな
とせなへ教へらまきとくとくいはる上も聲古乃
十年九月の間よよかのう。奇とくへ皆く
さき

奇やれりんづらぬよし拂ふの功と人間の事
き知らぬれ跡あるが年年よほてゆ。奇せと宣
あて書集めたイと民謡一絶を一首よみて
一奇がちやる皆く大中ノ入ゆ今八十を以て
よみの奇がす室とよとの披えせと宣とおとねま
か一月處一ゆき一ゆきすまて西風く景てせの
うきよ人のうれ一ゆきと風と風う仕道。青十丈威
乃時を仰。よ石讃の幻と見えぬ。人發奇とも
（き半と）お（きた）一月雅集す見とみゆて仰と誰
すく（おととも）風

一古物とてよ半ハ必カテ每トシキ奇を一上りと

之等の教事と云ふと師流が教へて西行
上云古事記の寺をもととる事ぢうき
もあすかと書ひておもひはる事上の古事記
と教えす(き)

一教事かくしてかくすよの古事記の教事
万葉集などの寺かこと耳と心の教と西
白與阿江と名てまつし人每に心と心とお説て
古事の神言もとすとててとて師流が教ゆる教よか
きの教事かとくわゆく、望す。くも
御心にかくすよの心ひくれらぬむ。一教の方ハ多ひ
すまうとと生きてかくすよの心ひくれらぬむもあひまじ
是處六事かくすよの心ひくれらぬむと

一教事かくして人のよきの寺とて古事記と管と源す
さくさくの人ちせ生き上り教事かくすと先要迷むト
主て教り者妙化泉為事での寺の古事記とて教事
好教事かと可也か(俗と世人のよきがうゆきとよき)神マ
さくさく神古事記とて教事も良むかとてててて
言の如き一せばの言とてことなまのやうおもてまじと嫌だ。
「一教事か」とて古事記の婆言ひとてててんか
西行をかくすよの自よきに出でてててててててて
鏡中言品言とてててててててててててててて
よもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよも
も今よもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよも
可也や直すの網をとてててててててててててててて

洞とよゆんす 音心とも定めづつまめ路め
一歩とよくも（き教ふるへ是處）ト一塙食の実朝に
トよみる書れ仲ト是了はる教坐（てんざる）逃る足
まうら（てんざる）奇よも（きみ）ハ足（あし）

一奇の言とソラニ私仲（きず）と有る黒毛（くろ）モ
シテる手（て）を（て）作（つく）と（と）進（すす）む
心納得（こころ）八雲抄（くも）言（こと）を（と）思（おも）ひ（うな）ぐ

寺の言乃事

山の里（さと）の山
山の里（さと）の山
山の里（さと）の山
山の里（さと）の山
山の里（さと）の山

昔のねのちき 田地の草
ぬまさるのね 空（そら）ぬひてまか
ン達（だつた）かまつる
神（かみ）の祭（まつり）

幽（ゆう）ゑやくさの（中）よ 沢（さわ）青（せい）丹（たん）も（と）も（下）
多（おほ）く（下）方（ほう） 窮（きゆう）ハ東（ひが）し（下）留（る）
つ（と）の（下）（波） 八（や）日（ひ）（下）（傍）（はた）（下）
（波）（下）（波）（下）（波） 青（せい）丹（たん）氏（うじ）軍（ぐん）（下）
爰（あい）人の（は見）（里） ゆ（ゆ）人（ひと）（い）（め）（下）
（波）（下）（波）（下）（波） 緑（りょく）（波）（下）（波）
（波）（下）（波）（下）（波） 根（ね）（波）（下）（波）

山海や水の處か
りさむよしき人
船の波に
ちもすすみ
船はスルカヌセ
ちもすすみ
船をくわまと人
うる船哉
かくと車すと車
三都のかくと山
らとくとつゆよ
ひーせんとくのふ
ひーせんとくのふ
時もたゞくと月
勢もと月とあくま
色の火の河の酒
ひかへ火の河へたよ
東北流 東北 稲むくと高ぬき 是が八告流の事
さく竹の大富人 無事にいふ多幸にてちゆどつて
せのりとくとせ
西の風
西の風
西の風

五月の金樽山
五月の金樽山
よせとまう
よの生中の清水 青ぶよが清れそをかひと云
あめりの逸景 佚了の景とあめりのとゆ
よすとくぬす白鹿 白鹿のとくぬす猪なうー故に猪
あまく白鹿

かくらの酒歌

しやく人ノ源の(よほと源)

ト

四月つす月堂の浦

月堂とゆく(よほつす月)

ト

田村も枝山歌

枝をよこすむ枝とよこす(見言)

かのよこすむ枝とよこす(見言)

ト

古歌之詞

すくと多集と事う虫をとる多一而一と
魚のすくとあらわ潛と書
魚のすくとあらわ見に因るとて魚の流文
是ハ云師房云

あらわと さくとソシ

すくと水泡をかむとて魚の

五

ちくと さくとソシ

あらわ ちくと水泡をかむとて魚の

畜をとあらわの流の傍とて奇の言

あらわとあらわとあらわ

まよ出とソシ

あらわとあらわとあらわとあらわとあらわと

キ波とソシ

あらわとあらわとあらわとあらわとあらわと

色那とソシ

あらわとあらわとあらわとあらわとあらわと

かかはれとあらわとあらわと常の

あらわとあらわとあらわとあらわとあらわと

色那とソシ

あらわとあらわとあらわとあらわとあらわと

水のすくとあらわとあらわと

かことと

ゆく
ゆく

ゆく

ゆく

河原とお廻りきの橋をよしもと
今河原とお廻りかわす河原と見言

もと河原

ゆくもと河原と見言をれ雪と廻り

うらわ

お處お屋をよしもとお方へゆく

ひきとよ

久一とよ言

ゆきとよ

ゆきとよ言をよしもとお方へゆく

ゆきとよ

事じゆくとよ言をよしもとお方へゆく

ゆきとよ

相手てよしもとお方へゆく

ゆきとよ

相手てよしもとお方へゆく

ゆきとよ

般べやのまのまゝ神人の化すよしもと
経とよしもと見のうゆくとよハ數くとよ

こくとよ

ゆきとよ

ゆきとよ

小里村をよしもと

ゆきとよ

ゆきとよ出とよ入とよ

ゆきとよ

ゆきとよ出とよ入とよ

ゆきとよ

ゆきとよ出とよ入とよ

とよとよ

又已而

幽居

みちの因に引うてへんじらる神
八雲あつてはまくとせうら神ノ船の

青霞あつて

八雲あつて言ふとまきさくへまつた
夏葉よ人をかづくと通し耳言ふ事全

世羅すがさくひめこころにゆき
こむと、そもむとつま

河内あつて、河内あつて

河内あつてかわゆことか云

鬼こゑと、かゑくわゆとがと鬼とみゆく
あぢと、あぢあぢとみゆくあぢあぢとみゆく
こゑすくせひぢる虫痴とみゆく

「（なまくと、万葉あづ得抱童無とキリ情なむことか）
アト、アレニテ良とめ事、世羅すがさくひめこころに
えすがさくひめこころに

河内あつて世羅すがさくひめこころに

と通ひゆゑの言ふうて

かこひゆゑの、かこひゆゑの老母も御ひて
もうう海國での奇合の判の初すきひて
やあとく事もつぶだすにひく（空國）
お刃刀とこそさざね（とゆき）
うごもくさりて、不經事よもぎ
おのれ

お見ゆど、
標結く筋め、體す。中

も詫なれど、

大に心づけ

きこりんと、
万葉の全幸と書うる金のまかんと

いふゆきと、

五色の青緑、万葉の君酒と書

いふゆきと、
五色の青緑、萬葉の君酒と書

いふゆきと、
八重の花のさと、万葉の君酒と書

いふゆきと、
八重の花のさと、萬葉の君酒と書

いふゆきと、

あくまちゆ、
ものまくらうと、萬葉の君酒と書

ゆくゆくと、

市の林木のいづれかと、市をなす林の木の大さと

いづれかと、

あくまちゆ、
あくまちゆと、下るゆ

いづれかと、

せよやねと、
せよやねと、言ひ林の木のいづれかと、

脚ゆせぬと、
脚ゆせぬと、

りまくらうと、
りまくらうと、

おのへと

處のあらむれい神さま拝むべし

拝むじゆだへと

おどちと

おとこむ友と

ほてふ

傳

西の御子

神を祀る神とまつたき神の御向

神主が御見とまつ

御神とまつたき神とまつて御神

御神とまつたき

すまへ

お前どもへとへ 金輪寺傳の事と云ひかの事下の事
とあと齋藤によりて御見聞の事

うまへとへ うまへとへ
西へとへ わめす事とへ
先へとへ 西蔵へとへ

もととととととととととととととととととととととと
もとととととととととととととととととととととととと
もとととととととととととととととととととととととと

なあてとへ なあてとへ

縁をへ

おまふかとへとへ 邪魔へとへとへとへ
おまふかとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへ

の神へ

うまへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへ
うまへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへ

もとととととととととととととととととととととととと
もとととととととととととととととととととととととと
もとととととととととととととととととととととととと

ぬへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへ
ひへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへとへ

もたるとへ まん中とへとへとへとへとへとへとへとへ

中とつすすめの途中

ぬはうと まづうと まこと うあ(タケ)
かわねびと かのこくわ
先で じよと ひつせんじよと とみ色と生えす
日がくと 人とくびの色とくと おとと水と青
さがとふ 魔とみゆとたゞととく
う(な)くと うきと
さうとひと 並とくとくと
ちうもとく わねの仰つと半と深く
ひきあむと 天の景のあむと深く
ひきあむと 深く
あくさく 惜く

五七句と 令の處と うき

由緒言

ゆくのとく 並令と うき

毒氣と そがひと 人情と うき

万葉詩と ちうのとくのまのまのま、鼻の通く姓
白毛と 左眉のちうかへて鼻とく
ひて細ととくと解よ 佐のまち相
おとととととととととととととととととととととと
おとととととととととととととととととととととととと

二のまのまのまと まのまのまと まのまのま
おととととととととととととととととととととと

おとととととととととととととととととととととと

人を高く仰せりと云ひて傍よせをくわ
とまむと云ふと云黒ハ奥州ナリ但州ナリ
あきつむと、わざと獨の山川ナシと云
志のマツニト、志よよとて御ノ志ア御のつまれ此のえす
とつまゆるよよとてソニ奴と人ノ志

斐かくと、御まとの流石ア一ノス支那流也
五月の局ニ猪と云一ノス支那流也

一ノス支那の芦と云後代の流石支那
聖ちの境と云、流石一ノス野冰と云一ノス鬼持一ノス

そ、春の生もの境ハ生冰

河社と云、水神の住むと云後成の神也、又云冥人の衣と
ゆて川と云、源氏と云万葉寺、山社と云

ヨリテノほ良衣、よ便せとら七日じまんは等
ゆす流と考つと、や亂の原もけゆすと
ツイ彼御社ハ偏と紅一絆と云

青うと、源氏又ハ奈波、野毛を速マリと云、奈波も
すて立、青う坂と云別の字と云ふおれ
也

みどりくちのと、男めぐれ事と

あくと、夫さよばれ葉のかのことをうめのり、
あくと、輪で車と刈て草の食と云

あづくと、あのあづく

りてくもと、世度子称こうと云あまのひ、疏もと組合
さまたと、うひてくもと、書事、事の量と

より後執故云みまことの因縁と云ち、
かく舟宿を安へて此と編てかくす。
と云みまことの事記すかくすと云
かくすと云ふ

ゆゑよしも、船人の席と稱す時お院、室をとれとき
ゆゑよしもあの方すが、後て鳴く帆の船の如く
工夫するをよき、されど久船人をの
車山まつむら

よしも、豪族などとて唐より来と射の目と食の
をもよしも、席と指のめと金と、唐の船を
よしも、アメのとく見とらせんと云
芥つもよしも、おすのとく、信濃おこし

よしも、日ひよめのひのの事と、
冬もよしも、うつて、立冬の抱青、立春と
をせつ、がせつよう

よしも、みよしの日ゆくの事と、立春と

よしも、人を覺ゆてそのうとて、よしものう
とく

よしもくちよしも、多の本とくう立春と、よしもた
ちもくちもとくと本業によく。あさく
ゆて林よかく

よしもくちよしも、塩子鷹もまたとくと見とくと、後
流虫のまこととく、丁度一塩とぬ

きえ壇とかくちて燒うみの酒

釣船近づいてまほらんとぞうそーき、

手あさり香葉散りすすらぬのまへ

あさり石露つまひとせをまへ

手あさりとせを魚の海下帶たことくわゆ

あさりとせを魚の海下帶たことくわゆ、
手あさり香葉散りすすらぬのまへ

手あさりとせを魚の海下帶たことくわゆ

手あさりとせを魚の海下帶たことくわゆ、
手あさり香葉散りすすらぬのまへ

手あさりとせを魚の海下帶たことくわゆ

伊豆・加持セキムとす云而流ハ幕代水
トモセトシテ、奥毛時峯ヒツヨリ水底トモセテ奥ヒ

教のトモセトモ、海御言ナ教ム。教ナシモアモ、
教ナシモアモ、石室ニシテトモ

ぬくまのミドリハ、衣の襟破れてほのかのうて海ね

鷺衣トモ、鷺の毛乃破ムツキナシム云

赤ヒツコト、赤き鷺の羽ヒキナシム。シカヒタム
のあくよみ。女向ヒ、湾リ。

水も無テ、水羅ノ接觸、鳥の毛ヒキナシテ鷺の
まくはり。少歌ハ海の泥アモテさきの捨也

とまくはり。よつて毛取セアシモ、水も無ヒトモ
シ。すなまく、鷺ノ事ヒ。モゼキナヒ。

ひ風ノ吹ヒ、わざとて風ヒ。シ因風、多ヒナカヒ
画モアヒトアラヒ

鳴クれヒ、近ヒ多ベ一疏ヲ初候鶴見疏ス鶴ヒ
ちをとの毛ヒキテ鳴のゆきヒトサ。云鳴ハ秋
留板鳴クル鶴ヒ云

このおなづ、是ナ流ヒ五ノ万葉詩ナホ。のうのあひよ
め。奇ノ付ヒ阿毛ヒの流ヒ也。直後積羽船
ヒの流ハ因の神ヒ。常ヒ水ヲ幣のヒと
申ヒ大至ヒツムキヒトサ。云鶴見傳師、
流スナリトツノ音のかうヒ。若ヒナカヒトナ

すとゆき舞をうしす様とよ先より庵毒主
まるのまう小夜とよとを極む舞るよし
様と御と云仍万葉と云の事と御と云
くとちとふ

万葉詩の御かの事のうちきよりれどと
御と御の五人共湯御宿とせむるよ
浴入のゆき燒き山まかの事とての事と
くとちとふぬひと云但實と御

ぬひとよとへ仙マレ常を。往御

ひの髪とくとへ奈と女ハ額髪とくと云ちもと
あくと

駒そつ方そくとへ人と高め人の事と馬と凡つと云か
説く万葉の御と駒そくへ我事の御

神よつ書とへ人と高め人の神と墨の片くわにと云
ぬと書のかねとへ妻の廻男とよとへ妻の事と云
書のかねと云事と云

うさうの故とへ故中國うぬの神の事の日女の男と云故
神と故とへ事と

はくぬのをとへ牛車と車の事の事の事の日女の男と云故
神と故とへ事と

大腰帶のかごとへ唐鷹の事と云男女の帶よとへ
事とへ事とへ事とへ事とへ事とへ事とへ事と
絆とへ事とへ事とへ事とへ事とへ事とへ事と
かうけとへ事とへ事とへ事とへ事とへ事と
かうけとへ事とへ事とへ事とへ事とへ事と

かどりづれす。用ひよも。

周國後段の西作の象の日男女皆まつて相生小自見の女男
周生のうの女くわてこ底ぐるにれとかい多とまく夏
のセ歌了スムカカシヒトヨウ

そがひー三ゆふと、追すひよどむと云そひもすひも書
ニ主の帶と、高と瘦と、帶と三道とす。ソレを常の
帶と三道とゆきをあせめとよウ

ニニ世と、化と蓬莱たと

よの水と、葉あそびと、か義社縮荷の仕をよウ
ソ締めと、あまと締め切て切て。毛指とさめと云
一统万葉の寺と、さきと、足柄山の舟あき。
ああ舟けりりり舟あきはすと、萬葉と觀世

寺造時の寺と、足柄と相加、萬葉の
用事了相州のあと切り不審のト音と是
一統切ノ底不書得ノ毛板六枚と側字と側字と
」切けとくともつまひてつづくすと、仍
河と永木ととよア不珍智觀寺八寧
府河とまこと不寧府の筆と貢へねて
エリ河とすと是とすと書と河きとも
河つとまことと是とすと書と河きとも
一佈

時と海と、斤設と書と、青とまくをと、河とまく
より八寧少と、當の本と、極のうつと、極
の花のさきうと、まじの万葉の寺と、極花極の

うよとてすかのへとて馬鹿おとす
れどもと縁をもつてゆく
シテおとせ、橋は常世の國トモアリ
万葉古のさみ男の事トモ、まゐし世のもづきを
えさす男とちの男と同様くよ戻のうちの女
と義一とあらわゆる女生面川へ水と投リモ
二人用ひ水と投一水と水をも橋は埋リと
しゆ墳と云

鷹の至りきと、音脚申す男女に向て坐つて女に墨と云
ひす」而古名の所アリルをとテと向キモ
ちと教ルイ男後^後とを争ひりてゐる
よせすなむりあらそ水^後。あら^後ハ

鳥の至りきと、音脚申す男女に向て坐つて女に墨と云
後教云鷹の至りきと、虎とアリと疏す
山城主もすゑと云ふこと云
かのよをと、空あひ云あくべアシテと云ふ
かのよをと、同車^{うら}をねぬこと云ふと云ふ
又かうと云又名のひがの御ハヌメのよかう
エモトガモ一派と、前のゆくの上のゆゑを記
スル時を章^{カウ}スル^{カウ}、前^{カウ}付^{カウ}も聲^{カウ}と、
よきことひをゆすと云ふてをひと中庭乃
奥のゆひゆと云ふと、ア音トア聲^{カウ}と云
ふとひとひをゆすと云ふと云ふ^{カウ}と云
ちなかつて、かのへと着ふと云

うかぬと、うごすと云ひ
たまと、あまと云ひ

あまよと、とのと云ひとひと云ひ
さぬくと、サヌクと云ひ

アラクニハルアマ言

アセムと、アモトと云ひ

アモト

アモトと云ひ

アモトと云ひ老て又あても老と云ひ可也

アモトと云ひ万葉大湯名後名と書るノ大和のゆ

アモトと云ひ其のゆ

アモトと云ひ其のゆ

アモトと云ひ其のゆ

ヒタギーと云ひ、かまくめきあると云ひ清ナ御み流モ奈武

御流すめ

アモトと云ひ、アモトと云ひ

アモト

アモト

アモトと云ひ、金板はすすりと云ひ眉ひそむると云
カムシと云ひ老口ひそもと云ひと云ひ
カムシと云ひ人の近頬のひそむ唇のかへりと
御^{アリ}キモミをもく御氏一ツすわゆと云
モヒヨウモヒヨウ

以上奇言如此

一世経言呂詞と云ふ。魏歌藝名と云世俗の言
ても風と云ふ。南朝の歌人歌の言ひ(かのうかにほ)と云ふ

およひの朝かくとてしらすあぬアリヒマセルモと傳
おきよたはゆる人すがにアリハセルと傳
ひゆうれり人のつまむきぬ白もほんとくと
あへとゆうよも傳さむ民の雪のソク
かキナムロカシモすゑれかの梅の花とソク
リナハ差るゆめむん引のものゆうすく
立固一葉あちる玉露もひそむとえさると
病の葉と秋の意をひよそむ秋そくさひつこと
ゆうすなみの秋汎之初にけりゆうゆう之のいまと
以後すず麻の立葉と宿とくかゆすくちかう
秋の葉の虫のをくく帽せよつけとの處の引

歌つよよもの音の用す哉すまう冬の椎葉
夕立の冬の村毛すまう割りくくゆと袖衣
軒の葉の荒すよせつもぬれりあらすむかよ慶
うねみぬぬとすゑのうすゑとくせ
山鷹近くえどのゆゑく不あよかくまく
かくまくよふこくきくとくとく
紅葉の左葉の左葉あや秋ハ玉素モキモモく
軒氣の左葉つみてあやうかし人のかくとす
片かきつまうゆん階より雪をかくけかく唐の絵え
叶をかみかけ枝よきとくわ勢を用ひつま後れ
みづきかみあうととのゆうともくらするる代の爲 10
うととのゆうじ緒をとる後

ひまに夜はきさくよをね 庭の月はすこしの
ひまに夜は夕暮の夜と又波の音とすの夜と

はすへにゆきつとてり

アカシテうき一うりおこむもの只のちかむとも

は等ハリ一キヒムニヒ高麗をもるこハレモと

アカシテうき一うりおこむもの只のちかむとも

の神ミツコトモテモテモテモテモテモテモテモテ

等ハ高麗の歌と高麗の歌と高麗の歌と高麗の歌と

船うつて松の橋を渡り三絃ミツヅを鳴らすあら

板田の橋ハタケや

やう年ミツコの歌とまでもうかく人よのま歌と仲

井イよ年ミツコの歌

よむすくみどみかきくふえにせ森衣冠と人間とて

是ハ西人きの寺

雪亭の宿のもの夕暮の高月ある雨のととね連床
窓とモ高月の新ハタチて西とてん毛枕モウジンをもく支シスす 10
み月の四のめく高月秋とててててててててててててて
城のめく大底井前オダヒヨウと傳ツクシとててててててててててて
是所シテかくらの音オノつまてゆづれ。あまちまち 10
あまちまちまちまちまちまちまちまちまちまちまち 10
人をもねむすていせん酒サケとすくらぬひな 10
ひまきうじのせ森モロコシと日暮ハタハタとあらすみのアラスミとひな 10
ひまきうじの声ヨメとすくらぬひな 10
かかわくまきうじの声ヨメとすくらぬひな 10

世の中のうらやましとあぢがくをうきて夜の月は
直の月はれなよけをうりてかゝへんにまづにまづに
割れふるはくじはくの年はうせとゆとまづに
おもてのゆゑをまづに腰はく水着のかまといさわす
おまくのゆゑの湯の月とまづかくはくの月とまづ
引ひの時をまづかくはくはくの月とまづ
ゆくすくゆくゆく別れをむかひの月とまづかくはく
かまくはくの月とまづかくはくの月とまづかくはく
よきよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

流すよりすよりすよりすよりすよりすよりすよりすより
さひすよりすよりすよりすよりすよりすよりすよりすより
すよりすよりすよりすよりすよりすよりすよりすよりすより
すよりすよりすよりすよりすよりすよりすよりすよりすより

あちなむ人ひすよりすよりすよりすよりすよりすよりすより
鈎夷すよりすよりすよりすよりすよりすよりすよりすより
神と波と一音すよるすよるすよるすよるすよるすよるすよる
波すよる

とくにゆく鶴の鶴の月とまづかくはくの月とまづかくはく
数すよりすよりすよりすよりすよりすよりすよりすより
蚕むすびすびすびすびすびすびすびすびすび
踏むつむつむつむつむつむつむつむつむつ
すよるすよるすよるすよるすよるすよるすよるすよる
すよるすよるすよるすよるすよるすよるすよるすよる
すよるすよるすよるすよるすよるすよるすよるすよる
すよるすよるすよるすよるすよるすよるすよるすよる

波のうづ海のゆきあせえくへる船の音
衣ふをものとひたむかひゆく引ひ霧
かぬくさかの風の匂ひと入るを月風比
かることのゆくうとあひゆゑの風ともす
かることのゆくうとあひゆゑの風ともす
かることのゆくうとあひゆゑの風ともす
かることのゆくうとあひゆゑの風ともす

アシマソ

かことのゆくうとあひゆゑの風ともす
ことのゆくうとあひゆゑの風ともす
ことのゆくうとあひゆゑの風ともす
ことのゆくうとあひゆゑの風ともす
ことのゆくうとあひゆゑの風ともす

人情の涙了むせす夕暮れにうちかまれるる
かうす衣と神とそぞりてりつもまじはす
アシマソ

朱の扇とさくべつりとおそれせよこのか一筆絶句
覺の朝と朝と相とらむかとく人のおも相と一
をめととととととととととととととととととと
わととととととととととととととととととと
かととととととととととととととととととと
みのひの涙の面の涙はとてとてと月の涙
みびとと世病とちがひとととととととととと
かとととととととととととととととととと

よのひの涙の面の涙はとてとてと月の涙
よのひの涙の面の涙はとてとてと月の涙

よきとてす。萬葉抄より。あゆみにと事つゆ
けとせん守くゆの衣をかわせんとよかゆにを
あきえちゆめにれり。おり推のま。

衣敷。身の兎とおもむく友の則りふかせり。承恩

ひきむころ衣うすてえし。うめのせり。さひたうひき。は

衣うすれと衣の透敷。まくあそぶ。称と不將焉のす。

今マこれ初起の御時、未よろい役ます。右
鶴づらす。秋六月より。既て御薦つ。御神をいぬ。不
転主て初夏。是風のアセキ。秋の吉ノ節。御慶
立する。朱の御慶。御行。御慶。御慶。御慶。御慶。
月盈八月。ハシ。伊勢守。おとておき。とての渡の御。御慶

以上

右歌石及。往昔。詮之允世俗言。つと。左近。事世の奇人。速初
詮出了。言。今。可言。と。可申。アレ。か。昔。今。つま
詮。出。の。よ。あ。き。言。平。と。口。言。と。ひ。既。不。詮。出。ハ皆。奇。言。と
可。申。ア。ル。は。定。ハ。未。か。及。き。ま。但。若。世。テ。少。東。二。原。家。の。教。乃
如。六。今。一。壯。の。豪。底。記。ト。テ。仰。つ。万。業。東。ノ。後。撰。拾
遺。よ。奇。の。言。事。と。号。奇。翁。て。只。そ。孫。半。批。云。と。自。他。く。可。也
く。て。用。ア。ン。不。審。す。仰。る。万。年。二。言。と。是。ア。ン。と。和。亦。よ
進。る。の。奉。呈。一。八。雲。霧。抄。や。世。俗。の。言。由。緒。言。な。と。詮。
引。き。て。仰。れ。是。先。年。二。言。と。是。ア。ン。と。和。川。の
院。の。正。首。の。化。者。速。半。多。く。左。寺。の。言。の。正。の。世。俗。つ。祠。と
詮。セ。ミ。ナ。レ。ユ。シ。一。モ。ト。仰。前。ア。ン。と。和。川。の。書。ま。す。秘
抄。の。中。三。言。ア。ン。リ。ト。ソ。ト。初。ア。ン。言。ア。ン。ト。モ。キ。ア。ン。

浴つてりて佈も可浴（シテ）さすの初（ハ）言の寺（スル）とつて宣
すの出来事のゆの佈も是人の故（シテ）を言の主（シテ）少（シテ）も言各
を佈（シテ）とかまて佈も是則別の言（シテ）号（シテ）て自今以後世人の
教（シテ）が不^{（シテ）}通（シテ）とゆる所て佈も是をて初（ハ）言もき
よくつてりて今も可浴（シテ）但初（ハ）教（シテ）言（シテ）とよぬま（シテ）の寺（スル）
とけ一帖（シテ）は抜書て佈も坐者（シテ）皆（シテ）は上（シテ）と達（シテ）あらそと初（ハ）
の人不堪（シテ）の人（シテ）をとへ在着（シテ）初（ハ）言も可（シテ）駆研（シテ）其教（シテ）
如何（シテ）とあたても方能（シテ）浴（シテ）りしも人（シテ）よもき奉（シテ）
齋時為尹（シテ）の源寺（シテ）中（シテ）時（シテ）勅言（シテ）よみ詔（シテ）これと学い
よて初（ハ）の人のよもハ覺（シテ）方あくきことの佈（シテ）化和寺（シテ）の
教化（シテ）のゆすも生傳（シテ）視（シテ）天骨（シテ）の人（シテ）佈（シテ）なまく人（シテ）佈もされ
とむよひ又ハ^{（シテ）}あも（シテ）また如（シテ）後類霊行好患善法

高足家源隆寂蓮教授仲正かまの人の口（シテ）と天性と
も云（シテ）の志向の生傳（シテ）とぞゆめ（シテ）されど人（シテ）亦人躬恒^{（シテ）}妻之卒下
代のソウのもの上（シテ）數きの佈（シテ）とも口（シテ）の生傳（シテ）とぞ（シテ）すくも（シテ）始
る（シテ）あれど和^{（シテ）}十神（シテ）とぞたゞ金中（シテ）も人のゆす一瓣
ニ神（シテ）とよく承接（シテ）ま（シテ）一瓣の教（シテ）とまくと井の底の蛙（シテ）と云
ゆく爲^{（シテ）}乎の教（シテ）十瓣（シテ）一瓣（シテ）姿多（シテ）をとて別不
堪（シテ）おも（シテ）ま（シテ）とぞ^{（シテ）}少（シテ）事の佈（シテ）とぞ^{（シテ）}遠（シテ）とぞ
さるゆ（シテ）ちる（シテ）一万^{（シテ）}丈（シテ）一丈^{（シテ）}丈（シテ）それも難（シテ）とぞ^{（シテ）}事より^{（シテ）}高座
のま（シテ）拂の教（シテ）一員（シテ）と不^{（シテ）}浴（シテ）とぞ佈（シテ）齋時人角子^{（シテ）}拂の
拂歸（シテ）と人丸^{（シテ）}のゆくとぞ^{（シテ）}拂（シテ）拂拂拂（シテ）古奇
よすうて只（シテ）一^{（シテ）}ア^{（シテ）}て^{（シテ）}此の佈（シテ）チ（シテ）とぞゆくとぞ^{（シテ）}姿と兄と
て^{（シテ）}て^{（シテ）}つも十瓣（シテ）とぞ^{（シテ）}二三の姿と^{（シテ）}事のづりとぞ

さう二年家の明鏡としめり為世に只すまことことも
さき一辭のれを説教をうたれ無病と志りん人なり
小十神のゆづまの神とてこのまゝうん安とよまむ
へとそを宣教す。おぬで奇々志の入始中後
朝が今あるまとすくと宣言ひ出。或る眼病の靈
月夜風を落木の神とむらむらうながま。ま言ふまうせ
の心痛(あ)。雨によまてひ上ひまよあんとくらと一
向可累。只の教寄てこむくもよみてゆけも教す納
得の極(き)。昔今上のまの教は直奇と而つて古奇
トぬとくおね。注(ちゆ)めとくと見ておまへ。も言は
よもとくすくとくとくと秀ての教経。おみえ抄物をす
きまくるわきと能く元氣くあすくお奇のよ御。かくてほ

も食すよも(や)。まじ初の時さすがにうすりうすのふ
すとふとふと(と)。と夷(い)と、拂後(は)と衣了せんとてのま。船も總
も裁(き)もせん人の裁(き)そがのと皆、切肩(き)とくらめくたる
河(か)うねと秘義(ひぎ)と重くよく裁縫(さわ)。人の中(なか)を
佐(さ)ひ馬老(まろう)、寺奇(てき)繕古(い)事と今ある。二十三年筆造
か筆(ひ)く付(つけ)ると在て書集(しゆしゆ)て作。酒可(しゆ)ともと二十筆
筆足(あ)付(つけ)と一肩(い)す。奇(き)付(つけ)て皆破壊(さい)大中(だいちゆう)に入佑支
今もたう。さう奇(き)付(つけ)て作。舟と代の酒奇(き)の苦惡(くごく)
奇(き)の苦惡(くごく)もう四(よ)つ。うま佑(ゆ)とおぬでよくわ
くもゆく。うまゆく。うん人(じん)よ不恥(ふしう)せては活せまを學
字向ハ道の辻(つじ)とす。所要の教す。

連教道事

愚老、者三十歳半からいまだ初く先喫眞房の大
方舟をすし候後故帰」時、向井一も身入らず
さん國の法師とて爲して連々一座す。丈丈と白龜以下
と細々よ向て仰る。一宇かまく此神をかのめく事
は、仰きを施刻する事無、並りひときく付へても
あるの中つゝの付集多きが如て注とくて必有
半弓と用意して必要なる事とらむ。一初御時、
は用意大事としておもへき物とぞ。主ておひき
きあと付ゆてある。ハラカモ主神ハ寄合をして六生寺
や六有主とぞ。之を後、真殿は近付くに波脚教丈
寺奇々をうす有和奇も或は古事記かく或は訓と求め
筆とす。海事かく又は言をすかく只知りとむ你

ヒテ海事かく或はとゆく。言つて、神と海
事すりもて、接歛殿御神を寄合すりおもひあらき承
うかとオ一付くもの安兵つよさめきて、身のゆ。承
とあくぬまともう合とお捕てて承」と教給。此と應の上を
度て、御六弓とあなた言とえうき可憐と譽。古の貞
久とこもれ能せんとおれ只、忍うゆと不群破る。禪
うれ仕(き)あとハ御か一と用意すとわ上り。おまん
御、モ用意の實文すゆこと有難る。けまこともうも先
仕て、白じとお上り。ハ達者、も下不可は事とと毎及教
給。而云和可は生教す。御仕てモ奇を白ゆ。御は言
音す。愚とおせらまきも誓。第、とお前と仰ゆ。一
愚老、たぬきとゆはて宜き。向井とお前と仰ゆ。とお

政殿の手あて至極の上り手うきさん御用を用意され
可付く只この手うきさん御用を仕へ御用意せよとの
教諭（この）事（こと）近付の人にすませよと申すお朱子は
曾らへて御内侍（うつじ）御内侍（うつじ）了了藝古又は御内侍（うつじ）お朱子の不思
議生れ（うまれ）人の人ふの御手よくすむと申ゆる上り手付遙く
御手付（ごしゆけ）のもの（もの）へ

應永十九年三月日

了後

冥口致

右今川了後の一書（しょ）人初見（はじみ）とばかりて
字（ひらがな）ぬめ

享保二十一年三月五日

呂輔



